

アカイシサンショウウオ *Hynobius katoi* Matsui, Kokuryo, Misawa et Nishikawa

【選定理由】

本種は従来静岡、長野、山梨の3県から知られてきたが、中津・島田(2019)により愛知県からも初めて報告された。県内における分布域はきわめて狭小で、砂防堰堤上のガレ場であり、堰堤の改修等の人為的影響を受ける可能性がある。現在知られている産地は静岡県側の産地と距離的には近いが、その間には天竜峡を隔てており、個体の往来はほとんど不可能である。このため、県内での絶滅のおそれはきわめて高いと言え、絶滅危惧 I A 類と評価された。



豊根村, 2018年12月9日, 島田知彦 撮影

【形態】

体の表面は紫がかかったような黒褐色で、通常斑紋を欠くが、部分的に銀白色の細点が散在している個体もいる。前肢には4本、後肢は5本の指を持つのが普通だが、後肢第5趾は短く、完全にないこともある。肋条は13または12。鋤骨歯列は浅いU字型。雌の一回卵数は9~13個と、同属の他種と比べて少ない。

【分布の概要】

日本固有種。基準産地は静岡県で、このほか長野県南部や山梨県南部からも報告がある。愛知県では天竜川水系の豊根村域でのみ報告がある。

【生息地の環境／生態的特性】

成体は、河川源流部の礫の多い斜面の礫の間や落ち葉の下で見られる。県外を含め、これまでに野外で本種の卵や幼生が見つかったことはないが、おそらくそうした斜面の地中深くの伏流水中に産卵し、幼生も地中で生活するものと思われる。繁殖期については、卵を持ったメスの出現状況から、4月~5月上旬と推定されるものの、詳細は不明である。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内の生息地は地形がきわめて急峻で斜面が崩れやすく、沢の本流には巨大な堰堤が設置され、細かい沢筋のすみずみにまで大小の堰堤が設置されている。また、周囲の森林はほとんどが人工林である。こうした状況を考えると、生息地の森林及び河川環境は過去に著しい環境変化を受けてきたものと推定される。県内における本種の分布域は元々それほど広くはなかったものと考えられるが、そうした人為的な環境変化によって更に分布域が狭められたことが想像される。

【保全上の留意点】

生息地の森林環境及び河川環境の保全をする必要があり、特に堰堤の新設や改修を行う際には伏流水への影響を含めた慎重な検討が必要である。また、本種を含めた小型サンショウウオ類には販売目的の採集圧も懸念されるため、生息地点の情報の取り扱いには厳重な注意が必要である。

【特記事項】

従来、本種は中央構造線より東側に生息するとされてきた(Matsui et al., 2004)が、本県の個体群は中央構造線を越えた西側に位置し、本種の分布域としても西限の集団であるため、生物地理学的に興味深い個体群である。

【引用文献】

中津元樹・島田知彦, 2019. 愛知県におけるアカイシサンショウウオの記録. 爬虫両棲類学会報 2019 (印刷中).
Matsui, M., Y. Kokuryo, Y. Misawa, and K. Nishikawa, 2004. A new species of salamander of the genus *Hynobius* from central Honshu, Japan (Amphibia, Urodela). Zoological Science 21: 661-669.

(島田知彦)